

て、藥屋にうるべし、是八新の一にて、古きをば用ひず、若二年にこゆるあらば、捨て賣べからず、

〔草木育種^下品〕薄荷^{本草} めぐさと云、野土の濕地に栽てよし、魚洗汁折々澆てよし、夏の内刈て一日日に干、それより陰乾にすべし、藥に用るにハ新き程よし、古きハ氣味薄くなるなり、

〔草木六部耕種法^八〕薄荷ノ作法ハ、大抵藿香ニ同ジ、且此物ハ葉ニ油ノ多キヲ上品トス、油多ク

葉ニ湊集ンコトヲ欲セバ、上ニ舉タル温養水五荷ト、人溺一荷、馬溺一荷トヲ調合シテ、時々根傍

ニ澆ベシ、如此スルバ油多ク葉ニ集リテ、其香氣ノ烈々タルコト、常ノ薄荷ニ十倍ス、

〔和漢三才圖會^{九十三}〕積雪草^{○中} 胡薄荷 地錢草 連錢草 海蘇^{加岐止平}

按積雪草無枝朶圓葉一一光潔引蔓可潛籬、俗名籬通也、本草必讀積雪草之圖有枝朶者非也、亦倭

名抄以之訓豆保久佐者非也、

○按ズルニ、ツボクサト、カキトホシトノ辨明ハ、積雪草條ニ在リ、參看スベシ、

〔書言字考節用集^六〕麝香草^{本草} 羅勒^{是矣} 羅勒^{本朝俗謂之麝香草}

〔大和本草^八〕麝草^{ジャウクサ} 彙苑曰、色紅而甚芳香、今按ニ此草葉ハ薄荷ニ似テ少アカシ、手ニテ其莖葉

ヲシゴケバ、其香麝香ノ如シ、ジャカウグサヲ水蘇ト云ハ非也、

〔和漢三才圖會^{九十三}〕麝香草 俗稱^{本名}

按麝香草高尺餘、葉似馬蔘^{イヌタケ}而厚潤、微有麝香氣、而甚於茴香葉之香、三月開花、單葉淺紅色而小、

〔本草和名^{十八}〕水蘇一名鷄蘇^{吳會一名勞菹}、一名芥菹^{仁謂音義作}、一名菘菹^{一名華道}、一名

〔多識編^二〕水蘇、今案加良、惠、俗稱利、字那、字久、左、

〔重修本草綱目啓蒙^九〕水蘇^{マハラガラ} 一名萎荷^{本草}、菜^品字、勞祖^{證類}

和産詳ナラズ、古説ニヤマハツカトスルモノハ穩ナラズ、山ハツカハ一名エグサ、藝州山野ニ多

籬通

麝香草

水蘇